
霧の中で待つ少女

へべれけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の中で待つ少女

【Nコード】

N3331Z

【作者名】

へべれけ

【あらすじ】

深い霧に包まれたとある場所。

そこにはひとつの駅があった。

あたりには何も無い。

そんなところで一人の少女がとある人を待ち続けていた。

「おかあさん、おかあさん」

そう呼びながら。

少女（前書き）

初めての投稿です。

まだまだ稚拙な文ですがよろしくお願ひします。

感想、批評など、どしどし下さい。

少女

第一話 少女

「おかあさん、おかあさん」

白いもやが一面に広がっているとある場所。見渡す限り、辺りは白一色で何も見えない。

しかし、その中にさびれた駅とその前に線路が敷いてあるのが見えた。

どこからともなく聞こえてきた幼い声。

それは少女のものであることが予想できる。

ポーン ポーン・・・

何か、跳ねる音が辺りに響わたる。

その音は、駅の小さな影から聞こえてくるものであった。

ぽおん ぽおん・・・

規則的に響き渡るその音は、駅にいる少女がボールを跳ねさせているものであることが分かった。

「おかあさん、おかあさん」

ボールを付きながら自分の母の名前を呼び続けている少女。

髪の毛は眉の上できちんと整えられている、いわばおかつぱ。

そして花柄の模様が描かれている着物を着ていた。

そんな、座敷わらしのような女の子が規則的に母を呼びつつ、ボールを付き続けていた。

・・・

そんなことを続けてどれくらい経ったであろうか。

少女はバウンドしてきたボールの勢いを吸収するように自分の胸元に抱えた。

そして、後ろにいるベンチの影に向かって言葉を投げかける。

「ねえ、おかあさんまだかなあ」

振り返り、くりっとした大きな目でベンチの影を見つめる少女。

その目線の先には、茶色がかった帽子を深くかぶった、スーツ姿の男性が座っていた。

だが、深くかぶっているためかどんな顔をしているのか分からない。しかし、両手を杖で支えながら少し前かがみに座っているその姿は、人を寄せ付けがたい、そんな雰囲気を感じさせた。

その男性は少女の言葉に対して少し身じろぎをした。

そして、

「まだ、だろうなあ」

と、少ししゃがれた声で応えた。

「そっかあ」

その、のんびりとした声を聞いた少女はまた、敷いてある線路の方を向きボールを付き始めた。

「おかあさん、まーだかな

おかあさん、はーやく、こないかな」

ボールのリズムに合わせて歌いながらつぶやき続ける。

姿だけ見ると、小さい女の子がただお母さんの迎えを待っている、そんな印象をうける。

しかし、周りに全く何も無い、白い霧に包まれている駅で、ボールを付き続けるその姿はとても異質なもののよう感じられた。

少女にとって。

ここがどこだか全くわからない。

気が付いたら、たくさんの人が乗っている電車に乗っていて。

気が付いたらこの駅に下ろされていた。

ただ、電車に乗る前に、誰かの泣いているような顔を見た気がした。胸の中につつかかるような感覚。

そんなものを抱えながら訳も分からないまま、この駅に下ろされた少女。

これからどうすればいいんだろう。

そう思っつて、一緒に電車から降りてい駅の下り階段へと向かっていく人々に付いていこうとした。

しかし。

おかあさんに会いたい。

なぜか、そんな気持ちが胸からあふれそうになった。

おかあさんって何だろう。

自分にとってのおかあさんって何だろう。

全く思い出せなかった。

でもなぜだかわからないけど。

おかあさんのことを思いだそうとすると、胸が少しキュツとなると同時に。

温かい気持ちが広がるのを感じた。

とても心地がよかった。

会えたら自分どんなになっっちゃうのかなあ。

そう思っつて、少し含み笑いをしたり、色々な自分にとってのお母さんの想像をしながら。

少女はこの駅で自分の母を待ち続けていた。

「はやく、はやく。」

こゝないかなっ

歌を唄い終わつた瞬間、少女は今までより少し強くボールを跳ねさせ、そして落ちてくるボールをキャッチした。

「おそいなあ」

そのボールを抱え込んでしゃがみ、少女は線路のずっと先を見つめる。

線路の先は白い霧で全く見えない、見えてもせいぜい10メートル先ぐらいだ。

しかし、むしろそれは少女の豊かな想像力は加速させた。

一体どこまでつながってるのかな。

どこからきているのかな。

そんなことを考えながら、少女は前のめりになって自分の目の前の黄色い線を越えないように自分が来た方向を見つめ続けていた。

「・・・」

早く電車こないかな。まだかな。

早くお母さん来ないかな。まだかな。

そんなことを考えると、少女は自分の体がそわそわし始めるのを感じた。

もしかしたら、少女のボールを付き続ける行動というものは自分のはやった気持を抑えるための行動なのかもしれない。

(もういいや)

少女はそう思い、またボールを付こうとしゃがみこんでいた自分の身体をすっと起こして立ち上がった。

急に立ち上がったためか。

少女は立ちくらみを起こしてふらふらと身体がよろめいた。

そして、黄色い線を越えようとした、その時。

「いやあっ！」

少女はいきなり声をあげて線の外側へとしりもちをついて倒れた。口をぱくぱくとさせながら、少女は線路を見つめる。

その目には怯えと恐怖の感情が浮かんでいるのが分かった。

あれ？なんでなんかな？

少女は大声をあげた自分にびっくりしていた。

とりあえず、立ち上がろうと両方の手に力をいれる。

しかし、足が震えて立ち上がることができなかった。

あれ？あれ？

なんで立てないんかな？

少女の頭の中にそんな疑問が浮かぶ。

それと同時に何だか泣きたくなるような、そんな気持ちに襲われた。

「・・・何で立てないんだよ・・・」

ぐっと力を入れても身体が言うことを聞いてくれない。

それが少女の焦りと不安を加速させる。

なんで立てないの？

なんでこんないやな気分になるの？

そんな考えに苛まれている少女の前に。

いつの間にか、先ほどベンチに座っていた男性が黄色い線の上に立っていた。

その男性は深くかぶった帽子を少しだけ浅くしており、顔がちらつと見える。

顔はしわがたくさん刻まれており、たくさんのひげが生えていた。

大体、60歳くらいの年齢であると推測できる。

そして、一番の特徴として。

その男性は瞳が青かった。

少女は怯えたようにその男性の瞳を見つめていた。

「おじいちゃん、そこ、危ないから

だめっ・・・だめだよお・・・」

少女は泣きそうな顔で初老の男性に懇願するように声をかける。

何で泣きそうになっているのか自分では全く分からなかった。

けれども、とつても怖くて、とつても嫌で、とつても痛い。

なぜだかわからないけど、そんな漠然とした思いが胸の中で自分を苛めている。

そんな気がした。

少女は、男性の足にすがりつくようにして引っ張って、線路から遠ざけようとする。

しかし、男性は全く動かなかった。

立ったまま少女を見下ろして、哀れんでいるのか悲しんでいるのかよく分からない複雑な表情を浮かべていた。

しばらく、泣きべそをかきながら引っ張ろうとする少女を見つめていた男性はしゃがみこんで、少女の頭を自分の胸へと寄せた。

「怖かったろう、大丈夫、大丈夫だ」

しゃがみこんだ男性のその表情には少女を安心させようとする、優しさに満ちているものがあつた。

「だめだよお、危ないよお・・・」

「大丈夫、大丈夫」

男性は少女に言い聞かせるように優しく言う。

すると、徐々に少女の顔が恐怖から安堵の表情へと変わっていくのが分かった。

なんだろう・・・あつたかいなあ・・・

少女は男性の胸になかでそんなことを思っていた。

なぜだか分からないけど。

だけど、今度はほっとしたせいかわ少女は目頭が熱くなってくるのを感じた。

だめ、すぐに泣いちゃだめ。

自分に言い聞かせて我慢しようとする。

我慢している少女の顔は膨れ上がったふぐのようで、男性は思わず吹き出しそうになったがここで笑ったらだめだとなんとか自分に言い聞かせた。

「我慢しないでいい、泣いてもいい」

前者の言葉は少女に投げかけたのか自分の本音を言ったのか分からなかったが、後者の言葉は間違いなく少女に向けてのものだった。

少女は自分が泣きそうなることを知られて、少しびっくりしたが、次の瞬間せきをきったように、涙が目からあふれ出した。

「う・・・うう・・・」

それを見られなくなかったのかどうか分からないけれども、少女は男性の胸の中に顔をうずめて、うめくように泣き始めた。

男性は少女の頭に手を乗せてやっていた。

「怖かったろう、もっと泣いてもいい」

「うう・・・怖かった、怖かったよ・・・」

少女の顔が涙でぐちゃぐちゃで、何を言っているのか聞くことも困難だった。

（あつたかい）

そんなことを少女は思う。

なんだろう。おかあさんみたいだなあ。

するとさらに涙があふれてくる。

「怖い、怖かった……」

「大丈夫、大丈夫」

なんで、このおじいちゃんはこのことをあたしに言ってくれるのかな？

考えたけれども、分からなかった。

なんで、あんなに怖かったんだろう。

それも疑問に思ったけれども、分からなかった。

なんで、あんなに嫌な気持ちだったのに、この人に抱きしめられるとすぐになくなったんだろう。

男性の胸の中で泣きながらそんなことを疑問に思っていた。

けれども。

（まあいいか）

そう思いながら、温もりを感じながら少女は男性の胸の中でしばらく泣き続けていた。

少女（後書き）

不定期更新になると思いますが、頑張つて早く更新したいと思つて
ます。
ので、何卒よろしくお願いします。

二人。(前書き)

月 日 怖かった日

今日はなんか怖い日だった。

線路を越えようとしたときに・・・

なんでだろう

けど、怖かったけど

おじいちゃんが優しくして温かかった

なのであの人は温かいのかな

桐乃

二人。

「もう大丈夫なようだね」

初老の男性は自分の隣に座っている着物姿の少女に声をかける。

さつき泣きはらしていたためか、少女の目は少し赤かったが、今はもう楽しそうな顔をして先ほどとは違い、線路のつながっている先ではなく線路を横断した先を見つめていた。

その先はもちろん霧で見えないが、少女は楽しそうだった。

今、雨が降っている。

少女の目には霧にまぎれて降り注ぐ滴の固まりが落ちていくのが見えた。

「ねえ、何で雨って降るの？」

男性の労りの言葉を無視して、宙ぶらりんの足をブラブラさせながら聞く。

時折、足のすね辺りが見え、そこに何か傷のようなものがあつた。

「うーむ、難しい質問だ」

少女の無垢な質問に対して悩む男性。

この霧に包まれた駅は時折雨が降る。

そのたびに2人で雨宿りをしながら、話をしたり、クイズを出しあつたりしていた。

今の質問もクイズの一貫なのだろう。

少女はにこにこしながら男性の顔を見つめていた。

（さて、どう答えたものか）

雨が降る理屈なんて説明しようと思えばできる。

しかし、そんな理屈を少女に話しても面白くないであろう。

だから少女が驚くような斜め上の解答を男性は眉をよせながら必至に考えていた。

「・・・君はどう思う？」

「だめ！質問を質問で返しちゃ！」

解答に窮したため、少女に答えを聞くことと思ったのだが、一蹴される。

「……うむ」

結局男性はまた一から考えなおすはめになった。ゆっくりと考え続ける男性。

そんな様子をじっと見ていた少女は、少し焦れたような表情になる。

「……じゅーう、きゅーう、はーち」

とうとう少女は待ち切れなかったのか制限時間を設け始めた。

この行為に男性は焦る。

しかし、少女をびっくりさせた時の顔を想像するだけで考える力が湧いてくる。

この少女は、斜め上の解答を出すと、とても目を輝かせて喰いついてくるのだ。

そんな少女の表情を見るのが、男性にとっての楽しみの一つであった。

いつも、母を待つ少女の顔が少しさみしそうだから、なおさらそう感じるのかもしれない。

「なーな、ろーく」

さて、どうしたものか。

そう思い考えていた男性はいきなりひらめいた。

「さーん、にーい、いーち」

そのタイミングは少女が制限時間の終了の合図を伝えた時とほぼ同時だった。

「……雨はな、誰かが泣いているから降るんだよ」

男性のその言葉を聞いた時、少女は少し意味がわからなさそうなほうけた顔をしていた。

「えっそうなの？」

男性の言葉に首をかしげる少女。

(ああ、やっぱり無垢だ)

男性はそう思う。

自分の想像通りのリアクションをしてくれたことに、男性は少し頬を緩めた。

そして、今度は自分の方から問題を出す。

「そうだ、お前が泣いた時に出るのは何だい？」

「えーと、えーと・・・涙？」

悩んだあげくそう答える少女。

「その通り、つまり今雨が降っているのはね、誰が泣いているから分かるかい？」

「えっ・・・えっ？えーと・・・」

少女は楽しそうな顔から一転、難しそうな顔に変わる。

眉をよせ、あれこれ考えている少女の姿は男性にとってなぜか嬉しかった。

そして、いつの間にか立場が逆転していることに気づかない少女を見て男性はさらに頬を緩めた。

「十・・・九・・・八・・・」

今度男性の方が数え始める。

それをみてあたふたし始める少女。

男性はその様子を数字を数えつつ、少し微笑みながら見つめていた。

・・・

こうしているとあの時あの頃を思い出す。

あの楽しかった頃のことを。

あいつの年齢はこの子より少し上だろうか。

そんなことを考えようとする。

すると、男性の頭にズキリと鈍痛が走った気がした。

男性は軽く自分の側頭部を手でおさえる。

「大丈夫？おじいちゃん」

そんな様子を見逃さなかった少女は男性に心配したように言葉をかける。

「大丈夫。少し頭痛がしただけだ。・・・五・・・四・・・」

数え始めると、少女はまたあたふたしだした。

そうだ、ただの頭痛だ。

自分にそう言い聞かせる男性。

あの頃はもう戻ってこないのだ。

そんな在りし日に思いをさせて何になる。

男性は数字を数えながら自問自答する。

・・・自分はなぜこんなことをしているのか。

男性は一つ自分に疑問を抱く。

この子とクイズを出しあったり、勉強を教えてやったり・・・

自分は孫と目の前の少女の姿を重ねているのではないか。

孫は・・・死んでしまったというのに。

なのになぜ死んでしまった孫とこの子を重ねるのか。
疑問がさらなる疑問を呼び、男性の頭の中は徐々にぐちゃぐちゃになっってくる。

（私は、電車から降りてくる人たちのようにこの駅の下り階段に向かうべきであったのではないか）

そう思つて、男性は目の先にちらつと見える階段の段差を見つめる。その段差は雨でぬれて、所々光沢を放っているように見えた。

・・・

「おじいちゃん おじいちゃん？」

考えにふけつている男性に少女が心配そうな声をかける。

男性の表情はとても険しく、顔に刻まれているしわが二重三重となつていた。

「うん？ 大丈夫だ。 少し考え事してただけだからな」

「そう、なんだ」

少女は何だか納得のいかなさそうな顔をしていた。

「それより、君の答えを聞かせておくれ」

少女に解答をうながす。

すると、少女は、はつとした顔になる。

その顔には充実感あふれるものがただよっているように見えた。

「うん、分かったよ！ 答え！」

元気よく宙ぶらりんの足をバタバタさせながら少女は興奮した様子で言う。

「正解はね・・・空だよ！」

『正解は・・・空！』

元気よく答える少女。

しかし、それとは対照的に男性は信じられないというような顔をしていて。

「ねえ、合ってるでしょう？」

『どお、おじいちゃん』

男性は思う。

なぜあの子とこの子が重なって見えるのだ。

駄目だ、重ねてはいけない。

しかし、そう思っても先ほど見た自分の孫の幻影は頭に色濃く残って離れない。

少し長めの真っ黒な髪の毛。

そして目の前の少女と同じような大きい瞳。

また、同じような着物を・・・あの日彼女は着ていた。

そうだな

この子と孫はそっくりなのだ。

心の中で男性はそう思う。

「ねえ、答え教えてよ！」

今度はさっきのように孫が重なっている映像は見えなかった。

(そうだ・・・さっきのは・・・幻覚だ・・・)

そう男性は自分自身に言い聞かせながら少女の問いかけに答える。

「いい答えだね、でも少し違うんだ」

在りし日に。

男性は同じような掛け合いを孫とした。

その時の答えは空、というので正解としていた。

だけど、今はなぜか違う答えが言いたいと男性は心の中で思った。

「正解はね・・・人なんだ」

「人・・・？」

男性の言葉に首をかしげる少女。

「そう。今世界には何十億人も人がいて、その人々はそれぞれがいろんな表情をもっている。

怒ったり、笑ったり・・・そして泣いたりね」

すうつと息を吸い込む男性。

その行動は目の前の少女と孫の姿を重ねないように、落ち着けるためびしていると感じられた。

「泣いてる人が特に多い時は雨が降るんだ。

・・・もちろん心の中で泣いている人も含むね」

「へえ〜」

少女はそう相槌をうつたものの、実際の意味は分かっているなさそうだった。

でも分からなくていい。

この子には笑顔が似合うと男性は思った。

少女はまた眉をよせて口をきゅっと結び何かを考えていた。

「じゃあ、今雨が降っているのは」

少女は難しい顔をしながらつぶやく。

「おじいちゃんも、心の中で泣いているからなの？」

男性はその言葉を聞いた瞬間、心臓が少し跳ねあがりそうになった。なぜ跳ねあがりそうなのか。

実際に泣いているからなのか。

「・・・分からないね」

男性にとって自分は今、どのような感情でこの少女と接しているのか分からなかった。

少女の顔から目を離し線路を見つめる。

外は・・・雨が降っていた

路面が濡れており、線路のレールが黄色い光のようなものを放っているのが深い霧をとおして見えた。

映し絵

『ねえおじいちゃん』

『空って青くて綺麗だね』

『私、生きてるうちに一回はあの遠くの空に行ってみたいなあ』

・・・私はわがままなのだろうか

少女の隣に座りながら思う。

この少女といえることは、少なくとも居心地は悪くない。
むしろすごく心地よいものだ。

ただ。

自分は本当にこんなことをしているのか。

死んでしまった後も、隣の少女と・・・七海の姿を重ねていていい
のか。

本当は自分はこの駅に降りてくる人々のように、まっすぐに階段へ
向かい、そして・・・

その先には一体どんなものが待ち受けているのか。

世に言う、血の池地獄のようなところがあるのか。

はたまた、花一面の美しい世界が広がっているのか。

そして・・・

大切な人が待っているのか。

死者は何を望み、この駅の階段を下っていくのか。
ふと考える。

けれども、それは本人にしか分からない。

もしかしたら、何も考えていないのかもしれない。

「おじいちゃん？」

少女が不思議そうに声をかけてきた。

その瞬間、自分の世界から現実の・・・霧の深いこの駅に戻された。

・・・何を考えているのだ自分は

そんなことを考えてもしょうがないではないか。

パンパンと気を取り直すため自分の両頬をたたく。

その様子を、少女はじつと見つめてくる。

そして、自分のまねをしたのか、少女も自分の頬をパンパンとたたき、私にニツと笑いかけて来た。

おそらく私の真似をして遊んでいるのだろう。

その仕草も、私の孫である七海とそっくりであった。

・・・この子は七海の生まれ変わりなのか。

ふとそんな馬鹿らしいことを考える。

しかしそんなことはあり得ない。

この駅は死者が訪れる場所なのだ。

この子も私も、現世ではいない人となっている。

だから生まれ変わりなどあり得ない。

だが・・・

あまりにも似すぎている。

だから影を重ねてしまっている。

こんなことをしてはいけないと分かっている。

この子と七海の姿を重ねてしまう。

「・・・皮肉なものだ」

私にとってこれは救いなのか、はたまた罰なのか。

分からない。

しかし私はこの駅で七海を待ち続けなければいけない。

会うために。

そして、あの頃と同じようにまた一緒に笑いあうために。

だから、それまではこの少女に色々なことを教えてやらなければな

らない。

あの日。

この駅で自分が少女に救われた恩を返すために。

そして、私があんな風にならないうちに。

経緯

あの光景は忘れられない。

孫と一緒に横断歩道を渡るうとして、車が突っ込んできてその瞬間、車がるでスローモーションのように見えた。

そして・・・

一瞬だけ身体に激痛が走ったのは覚えている。

しかし、気が付いた時にはたくさんのお若男女が乗った電車に寄せられていた。

それらの人々は、ほとんどが瞳がうつろで、話しかけても何も答えてもらえなかったのを覚えている。

「おじいちゃん、ここどこなの？」

隣にいる孫も一緒だった。

裾を引っ張り不安そうな目をしていた。

「さあ、分からないよ」

そう気丈にふるまってはみたものの、自分自身も内心不安でいっぱいだった。

なぜ私はこんなところにいるのか。

分からなかった。

私たちはとある駅で降ろされた。

そこは、霧の深い少し古さを感じさせる駅だった。

下ろされたものの、何をすればいいのか分からなかった。

しかし、一緒に降りた人たちは駅の下り階段へと、たどたどしく歩いていく。

私たちもあそこに行くべきなのか。

そう思ったが。

「・・・」

不安そうにしている孫が心配だった。

この子は大丈夫なのだろうか。

一緒に乗っていた人々の顔面蒼白の顔を見て怖くはなかったのだからか。

「・・・大丈夫、私がついてるよ」

そう思い、私は孫の頭をなでてやった。
すると

「う、うん・・・」

と少し怖がりながらも私の裾を必至につかみながら答えた。

「とりあえず、あのベンチに座ろう」

私たちの前には少し古びた木製のベンチがあった。

私たちは何をすればいいのか分からなかったから、とりあえずそこに座って何の目的も持たず、とりとめのない話やなぜか持っていた本やらを読んでやったりして2人でしばらく過ごした。

そして、とある日に・・・

この後のことは思い出したくない。

ただ、自分がその時に酷く意気消沈していたのは確かだ。

そしてしばらく茫然としてベンチに座り続ける日々が続いて。

あの座敷わらしのような少女がやって来た。

出会い（前書き）

沈みこんでいた気持ち。

それが、この少女によって緩和されたのはなぜだろうか。

少女と一緒にいる今でも理由は分からない。

出会い

その日は、雨が降っていた。

大粒の、当たるだけでも痛そうな粒が降っていた。

自分はそれを何も考えず茫然とみつめていた。

しばらくして、線路の向こうから黄色い光のようなものが見えた。

その光が徐々に近づいてくる。

そして、プシューっという音と共に電車が停車した。

ゆっくりと開くドア。

そのドアからはたくさんの人々が出てくるのが見えた。

無表情になりながら駅の下り階段へと向かっていく人々。

その中に。

一人の少女がいた。

その少女は辺りを不安そうに見渡しながら、雨を防ぐように頭に手を乗せ。自分の近くに小走りで近づいてきた。

そして、ストンツという軽い音とともに少女は自分の隣に座った。

・・・こんな子は初めてだ。

今まで、ここで見た限りでは電車から降りる人は一目散に階段へと向かっていくのに・・・

そう疑問に思い、ちらっと見る。

年齢は十歳くらいだろうか。

花柄の着物姿におかっぱの頭はまるで日本昔話にでてくる、座敷わらしのようであった。

少女は雨がふる様子をしばらくじっと見ていた。

するといきなり

「おじいちゃんは誰を待っているの？」

こっちの方に目をやらずに、雨を見つめながら聞いてきた。

・・・私は誰も待っていない。

ただ、ここにいるだけだ。

そう思ったが、口からは

「孫を待っているよ」

という言葉が出た。

なぜ、この言葉が出て来たのか分からない。

おそらく、私は孫のことをまだ諦めきれていないのだろう。

そして会いたいからであろう。

「そうなんだ、じゃああたしと一緒にだ」

少女は顔だけこっちを向き、笑顔で言ってきた。

その少女深い黒の瞳は見るものを吸い込んでしまいそうであった。

何なんだ、この子は。

よく分からない子に話しかけられたものだと思った。

「あたしねー、お母さん待ってるんだー」

自分のことなど気にせず、足をパタパタしながら少女は話し続ける。その少女は笑っていたが、少しだけ寂しそうな雰囲気を感じられた。

「君のお母さんはどんな人だい」

自分は気づいたら隣の少女に話の続きを促していた。なぜだか分からなかった。

単なる好奇心なのかもしれないし、この子が人を引き付ける雰囲気を持っていたからかもしれない。

「・・・分かんないんだあ」

少女はそう呟いた。

自分にとって分からない人をこの少女は待っているというのか。訳が分からなかった。

しかも更にびっくりしたことは

この少女が笑っていたことだ。

普通は忘れてしまっていたら悲しんだりするものではないのか。自分の中で少女に対する疑問が膨らむ。

「悲しくないのかい」

自分のなかで疑問に思っていたことをそのままぶつける

こういうことを聞くのは酷かもしれないと思ったが、気づいたら口から言葉が出ていた。

少女は私の言葉に対し、眉をぎゅっと寄せて、難しい顔をしていた。そして、

「分かんない」

そう答えた。

そうか、この少女は自分が大事なことを忘れているという自覚がないのか。

自覚があれば、悲しんだり、気が沈んだりするから。

自分の中で納得する。

「けどね」

少女は付け加える。

「来てくれなかつたら、寂しいなあ」

少女は線路を見つめながら答えた。

この子は母親に対する漠然とした思いを抱えて、待っているのか。

そうだとしたら、それは不幸なことだと思った。

「ねえ、おじいちゃん」

少女は線路に向けていた目をこちらに向ける。

その深い黒の瞳は、見つめているだけで吸い込まれてしまいそうだった。

「おじいちゃんは、誰かを待っているの？」

「・・・待っていない、ただここにいただけだよ」

「うそ」

ぴしゃりと少女に言われる。

「おじいちゃん、さっきからすごく寂しそうな顔してるもん。誰かに会いたいでしょ。だからここにいてるんでしょ？」

自分の心を見透かされているのか。

確かに、私はできるならば孫に会いたい。

しかし、それを初対面で雰囲気だけで見抜くことなどできるのだから

うか。

「・・・そうだな、私はだれかを待っているよ」

なんだか、この少女の前では嘘がつけそうではなかったから、本音を言った。

すると、少女はびっくりとした顔をして、

「当たった・・・」

と呟いていた。

・・・益々この少女のことは分からない。

さっきのは勘だったのか。

一体この少女は何者なのか。

分からなかった。

ただ、待つということは確かに悪くない。

今まで、孫はもう階段の向こうから帰ってこないのではないかと、

ずっとふさぎこんでいたが、そんなのは誰が決めたのか。

自分だ。自分の思い込みからだ。

そうだ、もう一回孫に会えないと決まったわけではない。

待とう。

階段の向こうへ行ってしまうた彼女をここで待とう。

この少女と一緒になら、なんだかできるような気がしてきた。

自分は、少女に向かって少しだけ笑顔を見せる。

それに対応して少女も笑顔を返して、そしてこう言ってきた。

「じゃあ、一緒に待とうよ」

青年（前書き）

幸せ。

これを生きている時にもっと実感できていたらどれだけよかっただろうか。

私は死んでしまった今でも、幸せを感じてしまっている。

それを私は受け入れている。

そんな私を七海は受け入れてくれるだろうか。

青年

「あ、すごい！虹出てるよ！おじいちゃん！」

雨も小降りとなり、先ほどに比べて少し視界があける。

その先には、虹。

線路を横断した向こう側に大きな虹がかかっていた。

雨上がりのそれはとても美しく私もしばらく見とれてしまう。

桐乃は大きな虹を見て興奮したのかベンチから立ち上がって、できるだけ虹に近づこうと線路のぎりぎりのところまで走って行った。

『すごいね！あの虹！』

孫とここで一緒に見た虹。

それは自分の中では鮮明に色濃く残っており、今見ている虹とそんなないほど頭の中に強く残っていた。

・・・この虹をもう一回、七海と見たいものだ。

しかし、そのためには待たなければならぬ。

「ねえねえ、おじいちゃんも来なよ！」

遠くで手を振っている少女。

私はこの子と幸せな時間を過ごしていると、実感する。

それが、七海に対して後ろめたい行為であることも。

・・・すまない、七海。

もう少しだけ、私に幸せな時間を過ごさせてくれ。

いずれ君が戻ってくるまで。

私は少しずつ、駄目になってきている。

最近考えようとすると時々、頭の中にもやがかったようになって、ボーっとすることも多くなった。

いずれ、私も君と同じように自我を保てなくなるだろう。

それまでどうか。

桐乃との時間に幸せを感じている自分を許してほしい。

雨上がりのキラキラとした光沢を、地面の水たまりが放っている。私はそれを見つめていた。

「・・・今行くよ」

この心地よい時間を自分はどれだけ実感することができのたろう。私はそう思いつつ、ゆっくりと立ち上がり、桐乃の元へと向かっていった。

「・・・すごいなあ」

桐乃は大きな虹をしゃがみこんで見つめていた。

「ああ、すごいね」

私がそう言つと、桐乃が虹を見つめつつ

「・・・私もあの虹に行つてみたいなあ」

そう呟いた。

カーーン・・・カーーン・・・

線路の向こうから、電車が走る音が聞こえてきた。

その方向をみると、黄色いぼんやりとした二つの光が近付いてくるのが見えた。

「あ！電車来た！」

その途端、桐乃の顔が明るくなる。

それはそうだろう。

あの電車にもしかしたら、母が待っているのかもしれないのだから。桐乃は急に立ち上がり、電車が来るのを今か今かと待ち構える。

電車が自分たちから十メートルくらい近くに来た時に、桐乃は電車に向かって走り出した。

電車がプシューッという音とともに止まる。

そして、ゆっくりと電車のドアが開いた。

ドアから最初に出て来たのは四十代後半の天然パーマの女性だった。一見普通そうに見えるが、その目はどこを見つめているのか分からない虚ろなものであった。

桐乃はその女性に。

「あの、お母さんはいますか？」と声をかけた。

女性はそれに対して女性は桐乃を一瞥したあと、何も言わずに駅の下り階段へと、向かっていった。

そして、次の人が降りてくる。

今度は、三十代の男性だった。

桐乃はその男性に対して同じことを言った。

しかし、無視される。

お母さんはいますか。

桐乃は毎回電車が来て降りて来た人たちに必ず、そんなことを言う。だが、大抵は無視されたり、少しだけ嫌そうな顔をされたりして何も言われず桐乃の求める解答は返ってこないのであった。

私はその様子を毎回見ていたため、ある日。

「声をかけるのは無駄じゃないのか？」

と忠告した。

しかし、私の忠告に対して桐乃は、

「・・・私から声をかけないとお母さん困っちゃうから」

そう言ってきた。

そう言う桐乃の表情からはとてもまっすぐな意志が感じられた。

なので、私は全く言い返すことができなかった。

それ以来、私は桐乃が電車から降りてくる人々に声をかけるのを見つめているだけとなった。

無視されても無視されても声をかけ続けるその姿は、とても健気で止めることはできなくなっていた。

「ねえねえ、おじいちゃん！」

何だかびっくりした様子で、電車のドアから手を振ってくる。

桐乃の近くに姿はよく見えないが、人影があった。

桐乃が私の方を指さす。

・・・誰かと話しているのだろうか

その人影は私の近くに徐々に近づいてきた。

それにつれて、どんな人物なのか徐々に見えてくる。

黒くて短い髪の毛で清潔そうな青年だった。

上にはチエツクのTシャツを着ており、下にはジーンズを履いていた。

なんなのだろうか。

その青年は私と距離が一メートルもない位置にまで来た。

さすがに霧が濃いとはいえ、よく見える。

その青年はなんだか、思いつめているような表情であった。

「・・・どうかしたのかい」

なんだか、言い淀んでいるようであったので、私の方から切り出す。すると、青年は私の顔をじっと見た後、真剣な顔をしてこう言ってきた。

「あの、妹を知りませんか？」

過去 1 (前書き)

『ねえお兄ちゃん』

『私の事、好き?』

過去 1

自分が18歳の時。

両親が暴走車両に轢かれて死んだ。

そのことを自分はとある一本の電話から知った。

自宅の電話がけたたましく鳴っていた。

その時自分は39度の高熱を出していたため、少しふらつきながら電話に出た。

『はい、もしもし』

『あの・・・青木さんのお宅でしょうか？』

電話口の向こうは四十代程の男性であった。

なんだか声が上ずっているように聞こえる。

それに。

電話の向こう側はなんだか騒がしかった。

『はい、そうですけど』

自分がそう言うと、電話口から少しだけため息が聞こえた。

『あの、落ち着いて聞いてくださいね』

この男性は一体何者なのだろうか。

警察なのか。

心の中で自分は疑問に思った。

そう言う男性の声は、やっぱり上ずっていてさっきに比べて少しだけ早口になっていた。

・・・だけど、その言葉を聞いた時、何だか嫌な予感がした。

向こう側の男性がゆっくりと深呼吸したのが聞こえた。

そして

『ご両親が亡くなりました』

そう告げてきた。

過去 2

自分が生きている両親の姿を見たのは、あの日の朝頃だった。その日はみんな、美希のお見舞いに行こうということになっていた。

しかし、自分はこの時たまたま風邪を引いていた。

『待つてよ、俺もいくよ』

意識が朦朧となりながらそう言った。

両親からみたら、俺の顔は熱で真っ赤になってるように見えただろう。

『ははは、これがどっちが病人か分からないな』

父さんは、明るくてあまり細かいことを気にしない人だった。

『駄目よ、今日は寝ていなさい。あんた受験生なんだから』

母さんは、心配性な性格で父さんとは反対に、心配そうな表情をこっちに向けていた。

その手には、美希に届けるためのパイナップルやリンゴの入ったソケットがあった。

『でも・・・』

母さんの心配そうな表情に少しだけ胸が痛む。

ただどなんだか、嫌な予感がした。

身体が寒い。

全身から、冷たい汗が噴き出てくるのを感じた。

『修一、そんなんじゃないから今日は家で寝ていなさい』

そう言いながら、父さんは玄関のドアを開け放った。

その途端に夏のむわっとした風が吹き込んでくる。

今日は快晴のようだった。

家の玄関へとつながるアスファルトの上に陽炎が立ち昇っているのが見える。

『大丈夫よ。また来週みんなで行けばいいじゃない』

母さんは優しい表情をしてそう言ってくる。

自分はその表情を見ると何故か、反論する気がなくなっていた。父さんはちらつと腕時計を見る。

『じゃあ行ってくる』

そう言つて外へと歩いて行った。

『安静にしているのよ』

母も外へと向かつて行く。

その時に2人が並んでいる姿が遠く感じられた。

自分は何故か手を伸ばそうとしたが、届くはずもなく無情にもドアは閉められた。

・・・何だろう、何だか胸騒ぎがする

そう思つて外に出ようとしたが、視界はぐらつき今の自分は立っているのもままならない状態であった。

頭がボーっとして倒れそうになる。

・・・寝よう

そう思つて自分はゆっくりと部屋のある二階へと向かつて行った。

ーそれから五時間経つてからであろうかー

この電話が掛つてきたのは。

寝起きでまだ、頭の中がボーっとしていた。

そのためか、警官が何か言っているようであったが全く聞きとることが出来なかった。

ただ、先ほど警官が言った

両親が亡くなった

その言葉だけは鮮明に頭の中を渦巻き続けていた。

・・・何が亡くなっただ。

朝は2人ともあんなに元気だったじゃないか。
なのに死んだなんて。

意味が分からなかった。

いきなりそんなこと言われても、実感が湧かなかった。

しかし、それから数日後の葬式で。

現実を痛いほど見せられることとなった。

それは葬式の最後に死者に菊の花を添える時だった。

黒い棺が二つあり、親戚や友人がその周りに集まった。

それがゆっくりと開かれる。

そこには。

白装束を着て青白い顔をして眠っている母さんと父さんの姿があった。

それを見た時。

頭が真っ白になった。

そして風邪でもないのに視界がぐにゃりと曲がり思わず倒れそうになった。

両親の死。

それを実感させられた。

だけど心の隅で。

・・・この場に美希は居なくて良かったのかもしれない、とふと思っただ。

過去 3

葬式の後。

自分は母方のおじいちゃんとおばあちゃんの家で預けられることになった。

自分の家からも近いし、美希の入院する病院も近かったからだ。

預けられることになった日。

玄関先で俺の姿を見た途端、おじいちゃんとおばあちゃんは泣きだした。

『大丈夫かい、大丈夫かい』
そう言われた。

自分はこの2人のことが好きだった。

昔から、よく遊びに行くとお菓子をくれたり、自分の知らない色々な話をしてくれたりしたからだ。

だからこの2人が自分を心配してくれることはすごく、嬉しかった。普通ならば、自分ももらい泣きしそうな場面だっただろう。

でも、今回は普通の精神状態じゃなかった。

胸の中にぽっかりと穴が空いたような。とてもむなしい気持ちでいっぱいだった。

だから自分はこの時、2人に対して、

『ごめん、少し一人にしてほしい』
としか言うことが出来なかった。

自分は今後どのようにしていかなければいけないのか不安だった。

―目指していた大学はどうすればいいのか―

―この先どうやって、日々を過ごしていけばいいのか―

そして最後に妹の顔が頭の中によぎった。
―美希をどう養っていけばいいのか―

この家にはただでさえ自分を養うので精いっぱいであることは分かり切っていた。

それに重なって美希の治療費。

到底払えるものじゃないだろう。

だけど、この事を2人に相談すると、絶対

『大丈夫、任せなさい』

と言つのは明白だった。

ただでさえ迷惑をかけるのは嫌なのに、その上自分は大学に行きた
いだなんて

―2人に言えるわけがなかった―

おじいちゃんとおばあちゃんは俺の気持ちを汲み取ってくれたのだ
ろう。

『こつちに来なさい』

と言って、仏壇が置いてある畳六畳くらいの部屋に案内してくれた。
ふすまを開けた途端、蚊取り線香の匂いがした。

だけどこの匂いは自分を落ちつけてくれる、そんな気がした。

『ありがとう』

あの時の自分に言える精いっぱい言葉だった。

2人ともその言葉に対し、少しだけ悲しそうな顔をしてふすまを閉
めた。

・・・自分の周りには何も無い。

けたたましい程の蝉の鳴き声だけが、自分の周りの空間を支配して
いた。

けれども、ここなら何故か落ち着いて心の整理ができる、そんな気がした。

・・・自分はこれからどう生きていけばよいのか。

そして、美希をどうやって養えばいいのか。

自分が考えないといけないことはこの二つだった。

ただどそのために自分がしなければいけないこと。

それはこの家に来る前から分かっていたことだった。

結論は既に出ていた。

ただ、それを実行するには少しだけ心の整理をする必要があった。

自分は正座をして目をつぶりこれからの事を考え続けた。

・・・どれくらい経ったであろうか。

ふとそう思っ外を見てみると日は傾きかけて、橙色の光が自分を照らしていてまぶしかった。

蝉の鳴き声は微々たるものになっていたが、代わりにひぐらしの鳴き声がうるさい程聞こえてきた。

・・・来た時はまだ昼頃だったのに、もうこんな時間なのか。

俺は今夜2人に話すことを頭の中で反芻しつつそう思った。

過去4

蝉が鳴いていた。

けたたましく鳴き続けるそれは、玄関での会話をかき消してしまうのではないかと錯覚してしまう程であった。

- 本当にいいのかい？ -

叔父と叔母はあの日の夜に、自分が下した決定に対して心配そうに聞いてきた。

ーうん、大丈夫ー

自分は使い古されたママチャリに乗った。

サドルは真夏の太陽に熱されていたが、我慢して乗った。

あの日の夜。

自分は2人に就職の道へ進むことを話した。

2人とも最初は反対していたけれど、何とか説得した。

これしか、方法はなかったのだから。

そして、それを伝える家族が病院にいた。

・・・おじいちゃんとおばあちゃんの家から十五分程すれば着く距離だ。

ーじゃあ、行ってくるー

自分はそう言い、走りだした。

真夏の太陽が容赦なく自分を照りつけていた。

周りが田んぼのあぜ道をバランスを崩しつつ、走り続ける。

- 美希は絶対反対するだろうなー

そう思いながら。

十字路を左へと曲がり、住宅街へと入る。

そして、そのまま真っすぐ進めば病院へと着く。

何故か病院に近づいていく度に自分が息苦しくなるのを感じた。

自転車を漕いでいる影響もあるのかもしれない。
しかし、自分は直感でこれは精神的なものであると感じた。
美希に就職のことを言うのに気が引けていたからかもしれない。
あいつは俺が大学に行つて教師になるという夢を応援してくれてい
た。

だから、あいつの応援してくれる気持ちを裏切るのが怖かったのか
も知れない。

そんな事を考えつつ走っていたら、白くて大きいビルの様な建物が
見えて来た。

あそこが美希の入院している病院だ。

徐々に近づいて行く度に足が鉛のように重くなるのを感じた。

流石に飛ばしすぎたか、そう反省しつつ病院の駐車場へと自転車を
止める。

降りた瞬間、汗が間欠泉のように一気に噴き出てきて気持ち悪かつ
た。

早く涼しさを感じたい、そう思つて中へと入った。

過去の終わり

中に入ると、清涼感のある空気の固まりがどつと押し寄せてきた。それは自分の汗だくの身体にとつてとてもよいものであった。

辺りを見回すと、たくさんの人々がいた。

友人と楽しく話している天然パーマのおばさん。

ソファにゆっくりと腰をかけて新聞を読んでいるお爺さん。

何か考え事をしている女性。

それらを見て、何故か自分が場違いのような気がしたので、早足でエレベーターへと乗り込んだ。

確か美希の部屋は七階だっけな。

ドアの近くにあるボタンを押そうとすると、こっちに向かって走ってくる女性の姿が見えた。

慌てて開くボタンを押す。

『ありがとうございます』

女性はそう言っただけで乗り込んできた。

良く見てみると、先ほど少し考え事していた女性だった。

『何階に行くんですか？』

『あの・・・七階をお願いします』

女性は息を切らしながら答える。

・・・自分と同じ階だ。

心の中でそう思った。

しかし、七階は結構思い病状の人がいる場所だ。

・・・誰か子供でも入院しているのかな

そう思った。

ゴーツつと音を立てながらエレベーターが上がって行く。

その間2人は無言だった。

汗臭くないだろうか。

そんな申し訳ない気持ちを持ちつつその場に立ち続ける。

『すみません、汗臭くて』

斜め後ろにいる女性に対して、振り返らずに言う。

すると、女性は

『そんなことないですよ』

と優しい声でフォローしてくれた。

『けれど、汗たくさん出てますね』

隣に来てハンカチを渡してくる。

―七階です―

機械的な女性の声が響いた。

その途端にドアが開く。

女性は

『ありがとうございます』

そう言つて、エレベーターを出て走つて行つてしまった。

渡されたハンカチ。

本当は受け取るつもりなんてなかったのだけれど、返しそびれてしまった。

・・・まあ、この病院でいずれ会つたらうしその時に返そう

そう思つて妹のいる病室へと向かう。

真っ白で清潔そうな廊下を歩いて行く。

少しだけ光が反射して、廊下に自分の姿が朧げに映るのが見えた。

時折、松葉杖をついて歩く人や、車椅子をを引いて進む人とすれ違ふ。

やっぱり、美希は重い病気なんだな。

改めて実感させられる。

額からは汗が噴き出していた

自分はさつき渡されたハンカチを無意識に使いながら進む。

そして

『あつた』

716号室

青木 美希

そう書かれた札が壁に張り付いていた。
その途端に気が重くなる。

両親のことをどう話せばいいんだろう。
そのことで頭がいつぱいになった。

コンコンとドアをノックする。

だけど、部屋の中から声はしなかった。

スライド式のドアをゆっくりと開ける。

部屋の中には小さなテレビや、雑誌やらが入っている本棚があった。

そして、美希の大好きな向日葵の花が花瓶に入れて置いてあった。

ベッドには誰も居なかった。

今検査中なのだろうか。

そう思つて、適当な椅子を探している時、ドアが開いた。

その先には

『お兄ちゃん・・・？』

入院患者が来ている白いパジャマを着た美希が立っていた。

目の辺りが少しだけ赤かった。

『よお』

できるだけ明るく妹に声をかける。

『来てくれたんだね・・・』

点滴の器具を引きづりながらゆっくりとベッドへと歩いていく。

そして、ベッドの端へと座った。

自分は妹と向かい合う形になるように椅子を持ってきて座る。

・・・

辺りを沈黙が包んだ。

蝉の鳴き声が微かに聞こえてくる。

どう話せばいいんだろう。

そう悩んでいると、美希は泣きそうな顔になりながら俺の胸元につ
ずめてきた。

『・・・心配したんだよ？』

『ごめんな、早く来れなくて』

俺がそう言つと、妹はぶんぶんと頭を横に振る。そして、

『う・・・うう・・・』

とうめくように泣き始めた。

俺は美希の頭に手をそつと乗せてやる。

『本当に、死んじゃったの？・・・』

俺の顔を見上げて聞いてくる。

『うん、暴走車両に轢かれた・・・んだって』

今の自分に言えることはこれが精いっぱいだった。

『そう。なんだ・・・』

美希は俺の胸辺りにまた顔をうずめる。

少しだけそこが湿っぽかった。

・・・泣いているのだろう。

自分は死んだことを聞いた時に、何故か涙を流すことが出来なかったから。

少しだけ、羨ましく思った。

『私・・・心配だった・・・お兄ちゃんも死んじゃったんじゃないかって』

『大丈夫、大丈夫だ』

頭を撫でてやる。

『あ・・・うあ・・・』

美希は少しだけ安心したのか更に泣き始めた。

18歳の自分と14歳の美希。

この、二年前の自分たちにとっての両親の事故は、とても厳しい現実を突きつけられるものだった。

そしてこれからも更なる辛い現実が容赦なくやって来ることを予知していた。

だから自分は

ろう

これからは2人で生きていくのだから、妹は俺が守ってや
そんな固い決意を胸に誓い、自分は泣いている美希の傍に居続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3331z/>

霧の中で待つ少女

2011年12月28日23時48分発行